

●代表世話人 退任あいさつ●

# 人生 100 年。私と日本共産党

## 増田 善信 (気象学者)

全国学者・研究者日本共産党後援会世話人総会にご参加の皆さん。私は先ほどの役員選出で、代表世話人を解任させていただいた増田善信です。9月11日に100歳になりましたのでこの機会に解任させていただきました。

私が代表世話人に選出されたのは、1997年9月5日の世話人総会でした。その当時の代表世話人は、元日本学術会議副会長・岡倉古志郎先生、東京大学名誉教授・神立 誠先生、愛知大学名誉教授・鈴木正四先生、東京都立大学名誉教授・寺沢恒信先生、元東京大学／名古屋大学教授・山口啓二先生と私でした。私以外は錚々たる学者・研究者で、まさに日本の知性の代表であるだけでなく、日本共産党を支持し、共産党とともに日本の政治革新に情熱を傾けておられました。そしてこれは歴代の代表世話人や事務局長の先生方、世話人の先生方、そして後援会の会員の皆さんに受け継がれてきたと思います。そして私もその先生方と一緒に活動できたことに誇りを持っています。本当に長い間お世話になりました。心から御礼申し上げます。

限られた時間ですので、「人生 100 年。私と日本共産党」と題して話をさせていただきます。

### ●小作制度の不合理をなくすには「天皇の親政」

私は、1949年5月15日に入党しました。従って、74年間、日本共産党員として生きてきました。

京都府の北、丹後半島の貧しい農家と言っても田が8反（1反は10アール）、畑が4反の、

Zoom 参加で発言する増田善信さん



一応自作農の次男で生まれました。しかし、何としても中学校に入り、さらに上級の学校へという望みを持っていました。

私の両親と家族は、私のこの望みをかなえるため、小作農になり、地主から5反の田圃を借りていたのです。当時は1反から玄米が約7俵取れましたが、小作料として1反につき5俵を地主に収めねばなりませんでした。全収穫量35俵のうち、25俵が年貢、残り10俵が私の学資になったのです。農家にはほとんど現金収入はありませんから、精米して、白米にしたばかりの米はおいしいので1俵につき10銭高く売れるというので、端境期まで玄米で蓄えておいて、端境期になると、両親は朝早く近くの峰山町で白米にして、売って歩いてくれました。

毎年、年末は嫌でした。父がコメ2俵を荷車に積み、私とその荷車の取っ手に縄をかけて引っ張って、地主の門を何回も潜って年貢を納めに行くのです。この時ほど惨めな思いをしたことはなく、何としても小作制度を止めさせねばと思うようになりました。

1942年4月、学費の要らない給費制の気象

技術官養成所本科に入学しましたが、交際費に余計な金がかかるので、出来るだけ友達をつくらないようにするため、図書室に入りびたりしました。そしてそこで、二・二・六事件に連座した青年将校らの裁判記録『昭和風雲録』を読み、北一輝『日本改造法案大綱』の影響を受け、「天皇親政の政治」にして小作制度を変えようという右翼思想の塊になりました。

1944年9月に気象技術官養成所本科を卒業、9月25日に海軍予備学生として、横須賀の武山海兵団から土浦の海軍気象学校を経て海軍少尉、出雲大社に近い大社基地で気象隊長。終戦間近の8月6、7、8日の3回「沖縄特攻」に征く兵士に天気予報を教えて送り出しました。

海軍の生活の中で、軍隊のでたらめさをつぶさに体験し、「こんなことでは戦争に負ける」と言ったばかりに、「罷免」の寸前まで追い込まれていながら、右翼思想を維持し、何としてもこの戦争は勝たねばならないと思っていました。

### ●3割の首切りの中で入党

1945年8月、敗戦で復員し、宮津測候所に復職しましたが、1946年4月、気象技術官養成所研究科に入学、49年3月卒業、4月に気象研究所理論気象研究室に採用されました。

その時は、気象庁は「行政整理」という名の「首切り」の最中で、気象研究所にも3割の首切りが通告された直後でした。私は、一応組合員でしたが、1947年2月の2・1ストの時はたった一人でストライキに反対するほどの右翼でしたから、気象研の首切り反対にも冷淡で、「組合は怠け者をつくる。自業自得だ」と思っていて、組合の集会には一度も出ませんでした。

ところが、4月25日の職場集会の時、養成所の時の数学の先生の曲田光夫さんから「今日の職場集会は非常に大事な集会だ。出てくれない

か」と頼まれたのです。恩師の頼みですから、やむを得ないと思って、嫌々ながら出席しました。

ところが、首切りの対象になっている守衛の道保さんという人が、「私は52歳ですが、小学校6年の娘を頭に3人の子どもを育てています。その子らの将来を考えるとどうしていいかわかりませんが、それよりも、この家からも追い出されるんです。どうか助けてください」と言って、米軍の空襲で壊れた瓦礫の中の掘っ立て小屋を指さして、泣いて頼まれたのです。

本当に驚きました。数年前に亡くなった父と同じ52歳の大人が、泣いて頼まれるのはなぜか。この首切りは間違っているのではないのか、と思うようになり、鍋屋横丁にあった米軍放物質を売る店に行って、チョコレートやチューインガムを買い、5月1日の人民広場（皇居前広場）のメーデーで売って、「首切り反対運動」の闘争資金を稼いだのが初めての活動でした。

当時は、やれ危機突破集会だ、やれ行政整理反対集会だ、など毎日のように集会が開かれましたが、その都度参加して闘争資金を稼ぎました。

5月15日、曲田さんが私を自宅に呼んで「私も東北の貧しい家に生まれたが、私が小学校を卒業するころ、あの有名な東北の大津波と大冷害が起こり、私の同級生の中からも小作人の女の子が何人も売られていったのだよ。その時、この苛烈な小作制度に反対し、命を懸けて闘ったのは日本共産党であり、農民組合、労働組合だったのだよ。増田さんは共産党や労働組合を“蛇蝎、のように嫌っているようだが、自分の境遇をよくよく考えてみるんだね」と諄々と諭されました。

私は身震いをするほど感激し、即座に共産党に入りました。

## ●「50年問題」と六全協

アメリカは占領当初は融和政策をとっていて、1947年には小作制度を廃止しました。あれだけ強固だった地主層は、天皇の命令以上に占領軍には従順で、何の抵抗もなく、マッカーサーの命令に従ったのです。

しかし、1947年の2・1ゼネストを強権で圧殺して以来、日本をソ連・中国に対する前線基地にするため、占領政策を変えてきました。1948年7月、マッカーサーは芦田内閣に政令201号をつくらせ、アメリカの政策に反対する全官公労働組合の団体交渉権とストライキ権をはく奪しました。その中で昭和電工事件という大疑獄事件が起こり、社会党も入っていた芦田内閣が倒れ、民主自由党第2次吉田内閣ができ、総選挙を行いました。この1949年1月の総選挙で、党は35議席に大躍進しますが、社会党は激減し、民主自由党が絶対多数を獲得し、第3次吉田内閣が誕生しました。この内閣は2回の改造を経て1954年12月まで続き、占領下の日本を、日米軍事同盟化の日本に切り替える役割を果たしました。

日本共産党は独立と主権の回復を目指す方針を持ち、民主主義擁護同盟という大きな統一戦線組織もつくりましたが、戦略的展望と効果的な方針樹立という点で不明確な点があり、占領政策への批判やそれとの闘争を避ける主張が生まれました。その結果、政令201号に反対する有効な闘争も組織できませんでした。それだけでなく、吉田内閣の支配の根は地域にあるとして、地方の警察や自治体に運動の矛先を向ける「地域人民闘争」などを組織しました。これが部分的に暴力的になり、共産党や民主団体を団体等規正令の監視団体にし、1949年7月の三鷹事件、8月の松川事件の「首謀者は共産党と労働組合」という官房長官談話まで出され

る時代になったのです。

そこへ、1950年1月6日、コミンフォルムの機関誌に「日本の情勢について」という日本共産党批判の「論評」が突然発表されたのです。スターリンによる干渉作戦でしたが、これに呼応したのが野坂参三で、50年4月、徳田書記長と党内に分派を作りました。

この党の分裂を察知したのかどうかわかりませんが、6月6日、マッカーサーは吉田首相に書簡を送り、日本共産党を「民主主義的傾向を破壊」するものと攻撃し、7人の国会議員を含む中央委員全員の公職追放を指令、政治活動を禁じました。翌7日には「アカハタ」編集委員などを公職追放しました。これは党中央の活動の自由を奪って、党を事実上の非合法状態に置くものでした。

この追放には、7日間の猶予期間があったので、正式に書記局会議、中央委員会を開いて、弾圧への対応を決めることができたのに、徳田らは、正規の会議を開かず、統制委員会指名というかたちで、6人の「臨時中央指導部」(臨中)を指名、「クーデターの手法」で党中央を解体したのです。徳田、野坂らは、その後、北京に拠点をつくり、武装闘争を国内に持ち込み、党と運動に重大な損害を与えました。これが「50年問題」と呼ばれるものです。

これ以後の党の分裂と、統一回復の動きは、『日本共産党の百年 1922-2022』に詳しく記述されているので割愛し、統一回復のための六全協(第6回全国協議会)について述べます。六全協は1955年7月に開かれました。この会議は、党を分裂させた側が外国の党と相談の上で準備されたもので、不十分なところはありましたが、徳田・野坂らの政治路線について、一定の反省を前提にしており、宮本さんなど第6回大会選出の中央委員も参加しているので、党の統一の回復と「50年問題」の解決に至る過程

で、過渡的な意義を持っていました。会議は、極左冒険主義と派閥的な指導の誤りを指摘し、新たな中央役員を選びました。

私が最も感激したのは、1956年6月の第7回中央委員会総会の、「日本を含む一連の国では、議会を通じて、平和的に革命を行うことができる」として、分派らの「51年文書」をきっぱり否定したことでした。

1957年10月の第15回拡大中央委員会総会は、全員一致で、「自主独立の立場」が確認されました。私は、この事実を報道した「アカハタ」を読んで、思わず、「万歳！」と叫びました。この一連の会議を主導したのは宮本顕治さんでした。

### ●ビキニ水爆実験と「核の冬」

1954年3月1日、アメリカはマーシャル諸島のビキニ環礁で、世界で初めての水爆実験を行いました。爆発威力は14.5メガトンで、ドーナツ状のキノコ雲は42kmまで達しました。マグロ漁船第5福竜丸が被災して、大きな被害を受け、久保山愛吉さんが9月23日にお亡くなりになりました。そのことはよく知られていますが、アメリカはキャッスル作戦と称して、ビキニとエニウェトクで3月1日のブラボー爆弾から、同年5月14日のネクター爆弾まで6回の水爆実験を行い、1000隻以上のマグロ漁船が被災したことはほとんど知られていません。私は、その中の高知のマグロ漁船の漁民とその遺族が起こした「船員保険支給」を求めた裁判のお手伝いをしています。

さて、私は同僚の藤田敏夫氏と共著で、日本気象学会の機関誌『天気』(第1巻4号、1954)に「今夏の異常気候と水爆の影響」という論文を発表しました。これは、大きな火山が噴火して、火山灰や土砂などを成層圏まで吹きあげて、

小さいチリが世界中にばらまかれると、太陽光線が遮られるので、世界の平均気温が下がるに違いないと考え、1883年のインドネシアのクラカタア火山の大噴火の後の世界の平均気温が下がっている図を示したうえで、1954年6、7月の東北地方の平均気温が平年より2°Cも低いことを示し、これはビキニの水爆実験の影響であると結論したものでした。

このアイディアは1954年5月20日に開かれた日本気象学会の春季大会で採択された『水爆実験禁止に関する声明書』に生かされました。すなわち、何故、日本気象学会が水爆実験禁止の声明書を出したのか。その理由は、①水爆実験によって成層圏に打ち上げられた放射能をもつ大量の灰は、地球を囲む大気の大循環のために世界中にはこぼれること。②このような大規模な大気汚染は長い間続くので、日射その他の気象現象に異常をきたし、今後の凶冷その他の気象災害との関係については全く予想をゆるさないことです。

私が属していた気象研究所理論気象研究室の研究者10名は全員で、この考えが正しいかどうかを確かめるため、大きな火山噴火の後の北半球の気温分布を調べました。当時は大きな火山噴火がなく、4例の資料しか使えませんでした。その4例の、6、7月の北半球の月平均気温の平年差を採ってみると、共通した分布をしており、5%の危険率を許すならば、大きな火山噴火後の北半球の6、7月の月平均気温偏差図と同じ6、7月の月平均気温偏差図が水爆実験に現れることが確認されました。これは気象研究所予報研究室員『火山噴火および水爆実験と気候異変』(『気象集誌』第33巻3号、1955)に発表されました。

しかし、この考えは、当時の気象の国際社会では認められませんでした。アメリカ原子力委員会のトンプソンは、前記日本気象学会の「声

明書」に反論する文書を日本気象学会理事会に送りつけてきました。

また、イギリス気象台長サットン卿は『天気』に「熱核反応爆発と天気」という論文（「水爆関連ニュース」『天気』第1巻5号、1954）を投稿し「水爆と天気の因果関係を決めることは極めて困難である」と否定的見解を述べました。これに対し、私が反論を『天気』に投稿しましたが、この問題はこれ以上発展しませんでした。

この後議論がたたかわれたのは、カール・セーガンら『「核の冬」核戦争後の地球』（Science,222,1983）が発表される28年前でした。当時、気象庁は大型電子機IBM704を導入して、数値予報を実用化しようとしていたため、私たちはその仕事に専念し、水爆と気候変化の問題はこれ以上進展しませんでした。

### ●「核の冬」と宮本・チェルネンコ会談

私は1984年4月1日、気象研を退職しました。退職を1カ月後に控えた3月初めだったと思います。当時は外国の雑誌は船便であったため、約3カ月遅れでしたが、Science,222(1983)を見て、前記のカール・セーガンらの「核の冬」の論文を読み「しまった」と思いました。ビキニ水爆実験の後に前記の「今夏の異常気候と水爆の影響」という論文を発表していたので、あの研究を続けていれば、私の方が先だったかもしれないと思ったからです。しかし、「核の冬」というネーミングには脱帽しました。

退職した私は、幾つかの大学の教授や講師の公募を見て採用を頼んだのですが、すべて断られたので、やむなく「核の冬」の調査をはじめました。驚いたことに、アメリカだけでなく、旧ソ連まで全く同じ研究をしていたのです。恐らくビキニの水爆のような巨大な水爆の威力をシュミレートして、どの程度の小型の水爆に

すれば使えるかを求めるのが本当の目的だったと思います。

アメリカ国立大気研究所のコービーらは、当時としては最先端の全球の9層の大気大循環モデルを使って、カール・セーガンらとほぼ同じ核戦争のシナリオで、20日間のシュミレーションを行っており、ソ連は、モスクワの気候研究室長アレクサンドロフらが、全球・2層モデルで1万メガトンの核戦争後380日ものシュミレーションを行い、いずれも「核の冬」が起こることを実証していました。

1984年に放映されたNHK特集「世界の科学者は予見する・核戦争後の地球」は、NHKの科学雑誌に掲載された「核戦争後の地球」を取り上げたもので、ディレクターは小出五郎氏でした。私は番組のタイトルには出ませんでした。その監修を手伝いました。ところが当時の民社党の伊藤昌弘衆院議員が「偏向放送」だと攻撃するということさえ起こったのです。

1984年10月26日、日本原水協主催で核戦争後の地球をテーマにしたシンポジウムが行われ、私は「核の冬、核戦争後の地球」と題して講演しました。すると、その1週間後の日曜日であったと思いますが、共産党の宮本議長から電話がかかってきました。「増田さんは先日のシンポで『核の冬』の話をしたそうだが、『核の冬』は正しいと思うか」という質問でした。私は「10メガトンもの核弾頭を打ち合う核戦争になれば確実に『核の冬』が起こると思います」と答えました。

1984年12月、核兵器禁止問題で「宮本・チェルネンコ会談」が始まりました。当時、日本共産党はソ連のアフガニスタン侵略に抗議して、ソ連共産党とは厳しい対立状態でしたが、核兵器問題の緊急性を考え、会談を申し入れたのです。非常に困難な会談だったと言われていますが、核戦争阻止、核兵器全面禁止・廃絶に

関する「共同声明」が発表されました。この声明は「この課題は人類にとって死活的に重要な緊急課題」と位置付けていました。

この声明を受け、翌 85 年 2 月 6 日広島で、9 日長崎で、ヒロシマ・ナガサキ・アピールが調印され、翌年夏までに、3000 万筆以上の署名が集まり、原水禁運動の第 2 の高揚期を迎えたのです。

### ●「非核の政府を求める会」と私

「非核の政府を求める会」の発会式は、1986 年 5 月 19 日、日本青年館で開かれました。これは宮本顕治日本共産党中央委員会議長の肝いりで、周到な準備の上に結成されたものでした。私が特に感動したのは、この設立総会には、沼田稲次郎東京都立大学名誉教授（元総長）、渡辺洋三東京大学名誉教授、塩田庄兵衛立命館大学名誉教授、岡倉古志郎元日本学術会議副会長、大田薫総評議長、亀田徳治元日本社会党大阪府本部委員長、関屋綾子元東京 YWCA 会長など、錚々たる人が参加していて、議長挨拶、開会挨拶、議案の提案など、それぞれ重要な役割を果たしていたことです。

この運動は、原水協など核兵器禁止・廃絶の大衆行動には参加が困難であるが、その運動を支持している学者・文化人などを非核の運動、特に「非核の政府を求める」運動に組織するというもので、全国に広がっていきました。東京でも「非核の政府・非核の東京を求める会」が結成され、1986 年 6 月、私はその事務局長に選出され、20 年近く務めた後、全国と東京の非核の会の常任世話人を現在も続けています。

### ●おわりに

党に入って 74 年。いろいろの曲折がありま

したが、私は「黒い雨」の再調査をはじめ、数値予報、「核の冬」、地球温暖化、原発事故などの学問・研究と党活動、組合活動の両立をはかって生きてきました。その中で、科学的社会主義の哲学「弁証法的唯物論」に接し、それを行動の指針にしたことにどれだけ助けられたか。党に入って本当に良かったと思っています。

私は「情熱は人を生み、知は人を育てる」という座右の銘を持っています。どんな仕事をする場合でも、これを何としても解決してやろうという情熱が必要です。しかし、情熱だけではだめです。私は「小作制度を止めさせたい」という情熱は持っていましたが、右翼になっていたのです。正しい理論があって初めて成功するのです。私にとって、それは「弁証法的唯物論」でした。

日本共産党は昨年、創立 100 年を迎えました。そして来年 1 月 15 日には第 29 回党大会が開かれます。11 月 15 日には、大会決議案が発表されました。私は田村智子副委員長の提案を YouTube で聞き、非常に感動しました。特に、これは「21 世紀の共産党宣言」だという言葉に感動しました。

今、日本共産党はこの大会決議案の討議と、党勢拡大の運動を続けています。なぜ、「しんぶん赤旗」を増やし、党員を増やす必要があるのでしょうか。それは「革命」をやるためです。平和的に革命をやるためには、国民のほとんどを支持者し、ほとんどの人を党に迎えることが必要だからです。

学者・研究者日本共産党後援会の皆さん。まだ「しんぶん赤旗」をお読みでない方は、この機会にぜひお読みください。まだ党に入っておられない方は、ぜひ党に入ってください。ご一緒に、21 世紀の新しい未来に向かう大道を歩もうではありませんか。

(2023 年 12 月 2 日記)